

NPCに転生したら、
あらゆる仕事が
NPC NI TENSEI SHITARA, ARAYURU
SHIGOTO GA TENSHOKU DESHITA
天職
でした
前世は病弱だったから、このVRMMO世界で
やりたかったこと全部やる

著 **k-ing** ill. **HIDE**
キング

2





バビット

飲食店を営む料理人。
ヴァイトのことを気かけ、
成長を見守る。

ラブ

プレイヤー
魔法使いを目指す勇者。
面倒見のいい
お姉さんの存在。

ユーマ

プレイヤー
拳闘士を目指す勇者。
明るく友達思いだが、
大半の難しいことが苦手。



オジサン

マーモットの姿の精霊。
他の精霊と違い、
流暢に人語を話す。

ヴァイル

身寄りのない獣人の少年。
助けてくれたヴァイトを
兄のように慕う。

ヴァイト

病弱で寝たきりだったが、
VRMMOのNPCに転生した少年。
元気になった体で、
前世ではできなかった
あらゆることを経験しようと
決意する。

チェリー

プレイヤー
森の祠から突如現れた勇者。
ヴァイトに弟子入りし、
日夜行動を共にする。

★
CHARACTERS

序章 社畜、突然の別れをする

この世界に転生して数カ月が経った。前世では病気で体を動かすこともできず、ただ息をするだけの日々だったが、転生してからは健康な体で充実した生活に変わった。

この世界で右も左もわからない中、料理人のバビットさんに拾われて、次々と優しい人達に出会って、俺はここでの生活を心のそこから楽しんでいる。好きなだけ運動しても、働いても苦しくないし、おいしいご飯だってお腹いっぱいになるまで食べられる。

そんな楽しい毎日を過ごしていたある日、突然勇者と名乗る者達が町にやってきた。

礼儀正しい勇者もいれば、犯罪行為をする勇者もいる。

勇者達と関わっていたら、いつの間にか俺はみんなから一目置かれる存在になっていた。

「ヴァイト様ー!!」

「よかったら私も鬼ごっこしてくださいー!」

「俺も仲間にいれてくださいよー!」

そんな俺は、現在勇者達に追いかけている。

拳闘士^{けんとうし}を目指す頭の弱い勇者、「ユーマ」を鍛えたことが町中に広まり、それを知った勇者達が俺に鍛えてもらおうと集まってきたのだ。

トイレをしても声をかけられるし、昼寝をしても無理やり起こされる。

こんな迷惑行為が最近さらに多くなっているような気がする。

「あいつらどこまで来るんだ!？」

俺は屋根の上に登って隠れるところを探す。

俺の訓練方法が注目されたきっかけは、町を襲った強力な魔物である大蛇の討伐の時だ。

俺と関わっていたユーマとその仲間が、大蛇相手に善戦したからだ。

ただ、追ってくる勇者の中には、強くなりたいやつ以外も混ざっているような気がするが……いずれにせよこのままでは俺のプライベートが不变^{ふへん}なのは変わらない。

「おつ、ヴァイト！ こんなところでどうしたんだ？」

物陰に隠れていると、後ろから突然声をかけられた。

振り返るとそこには、いつも通り元気な様子のユーマがいる。

ユーマは拳闘士だけでなく、斥候^{せうこう}の才能もあったのか、最近をよく二人で隠れながら遊んでいる。

「あいつらがまた追いかけてくるんだ」

俺が下にいる勇者達を指さすと、ユーマは苦笑いしていた。

「ヴァイトはみんなから好かれているからな」

「勇者は変わり者が多いな……」

「ヴァイトには言われたくないと思うぞ？」

勇者達に比べたら、俺は自分を真面目で普通なやつだと思っている。

働きすぎの変わり者と言われるが、時間の許す限り好きな仕事をしているだけだ。

そもそも、問題があったのは勇者達の方だ。

前は武器屋を脅したり、ツボやタルを壊したり、家に勝手に侵入したやつもいる。

それに井戸の中に入ろうとしたやつもいるくらいだ。

井戸の中って水しか入っていないのに。勇者って本当に変わり者ばかりだ。

「今日は生産街^{せいさんがい}には行かないのか？」

「みんな勇者の指導に忙しいから、暇になったら行くつもり」

大蛇の討伐以降、戦闘職^{せんとうしやく}の勇者の数が減った。勇者達が町に来てすぐは武器を持って戦う者ばかりだったが、今は生産ギルドに登録し、武器や防具を作る勇者が増えた。

勇者同士で助け合うことを覚えたのだろう。

武器職人のブギーさんや防具職人のボギーさんだけではなく、バビットさんにまで弟子がいるからな。

正直少し俺の居場所がなくなって寂しい。

「それにしてもヴァイト、また大きくなったか？」

「ああ、成長期だからな」

この世界に転生した時は小さくて細かったのに、おいしいご飯と適度な運動で、今では身長が百八十センチメートルを超えた。

顔つきもだいたいぶ大人になったって言われることが増えた。

「俺も大きくなりてーな」

「ユーマは身長より頭をよくした方がいいんじゃないか？」

「なっ、お前!？」

ユーマを押搦^{からか}うと、ユーマはじゃれ合うように俺の腹を突いてきた。

「きゃああああ！ ヴアユマよ！」

どうやら勇者達に見つかってしまったようだ。

俺とユーマの仲のよさが広まり、なぜか「ヴァユマ」とセットで呼ばれることが増えた。

最近では親友同士をセットで呼ぶことが多いと、ユーマと仲のいい魔法^{まほうつか}使いの勇者、ラブが言っていた。

バカのユーマと一緒にされるのは俺としてはあまり嬉しくないが、親友という響きに悪い気はし

ない。それでもユーマは大事な友達だからセット呼びも容認している。

「ほら、逃げるぞ！」

俺はユーマの手を引いて逃げていく。

「一緒に逃げたら意味がないんだけどな……」

ユーマのつぶやきを無視して町の中を隠れながら逃げていくが、勇者達は一筋縄ではいかない。

「きいやあああああ！」

走りながらふと目が合った女性勇者になぜか驚かれました。

その声がさらに他の女性勇者に広がっていく。

「ああ、ヴァイトになんて説明しようか……ラブもあんな動画を流す——」

「ほら、行くぞ！」

「はあー」

ユーマの眩きを遮り手を引くが、後ろからついてくるユーマはずっとため息をついていた。

勇者達をまくために逃げ込んだのは、拳闘士の師匠であるレックスさんの家だ。

俺とユーマが仲良くなったきっかけの場所がここだ。

「それにしても相変わらず汚いな」

「レックスさんは掃除が嫌いだから仕方ない」

俺はレックスさんの家に入ると、隠れるついでに部屋の中を片付けていく。

レックスさんは怠惰な人で、以前は毎日のように酒を飲んでいて、冒険者として働くことが少なかった。

そんなレックスさんも今では朝から冒険者として仕事をしている。

「今日も簡単に飯を作っておけばいいか」

「相変わらずヴァイトは器用だな」

掃除をしてからサツと料理を作れば、料理人のデイリクエストが終わる。

デイリクエストはその名の通り、職業ごとに毎日設定される課題のようなものだ。

これをクリアすることで、その職業の適性がどんどん上がっていく。

俺はできるだけ毎日欠かさずに、職業体験としてデイリクエストをこなしている。

ちなみに今の俺には、これだけの職業のデイリクエストが存在している。

【職業】

◆一般職

ウェ이터15 事務員12 販売員11 音楽家5 踊り子5

◆鑑定士2

◆戦闘職

剣士17 魔法使い16 弓使い14 斥候13 聖職者10

拳闘士8 ガーディアン6 槍使い6 狂戦士2

◆生産職

料理人17 解体士16 武器職人13 防具職人11 魔法工匠10

薬師8 裁縫師5 陶芸家4

今は二十三種類の職業があり、デイリクエストをすることで数値が1増えて、自由にステータスに割り振れるステータスポイントを3手に入れることができる。

ステータスは元気に仕事をするためにはどれも欠かせないもので、満遍なく割り振っている。これが現在のステータスだ。

【ステータス】

名前 ヴァイト ポイント18

STR120 DEX120 VIT120

一つのステータスだけを上げるとバランスが取れないため、今は一定のポイントが貯まったタイミングで均等に割り振るようにしている。

「だいぶ外も静かになったな」

外を確認すると追ってきていた女性勇者達の姿はない。

「じゃあ、またな！」

「おっ……おう」

俺はユーマに別れを告げて、元々の目的地であった薬師の師匠、ユリスさんの家に向かうことにした。

「……そういえば、俺はなんで師匠の家に来たんだっけ？」

ユーマがポツリと呟く。おバカなユーマは女性勇者達をまくためにここに逃げ込んだことを、もう忘れてしまったようだ。

「こんにちは！」

「よく来たね」

「ヴァイトさん、こんにちは！」

ユリスさんの家に入ると、ユリスさんと勇者のナコが出迎えてくれた。

ナコの働きもあり、ポーションの生産量は少しずつ増えてきて、無事に町のポーション不足は解消された。

もっとも、勇者達が無理な戦い方をしなくなったっていうのもあるのだろうが。

「私、薬草を採ってきますね」

ちょうど俺と入れ替わるようにナコは、庭に薬草を採りに行った。

俺もデイリークエストを終わらせるため、邪魔にならないように端で作業をする。

「そういえば、ヴァイトよ」

ユリスさんが真面目なトーンで話しかけてきた。

「何かありましたか？」

「ナコ達が隣町に行くことを聞いたか？」

「隣町に行く……ですか？」

「ああ、いつもヴァイトと訓練しているやつらも一緒に行くらしいが、ヴァイトも——」
さっきまで一緒にいたのに、俺はユーマ達からそういう話を全く聞いていない。

隣町に行く？ 俺達は友達じゃなかったのか？

俺なんかには別れの挨拶もしたくないという関係なんだろうか。

「あれ？ ヴァイトさんどこに行く——」

戻ってきたナコの姿が見えたが、俺はユリスさんの話で頭がいっぱいで、気づいた時には勝手に体が動き、外に飛び出していった。

「あつ、ヴァイト様だ！」

俺を見つけて声をかける人達もいるが、今はそれどころではない。

とにかくユーマ達を探す。だが、いくら探してもユーマはいない。

それどころかいつも一緒にいた勇者のアルやラブすら見つからないのだ。

もう町の中にはいないのだろうか。しかし、ユリスさんの話だとナコも一緒に行くと言っていた。それなら、ナコはまだユリスさんの家にいたのだから、この町にいるのはたしかだ。

「バビットさん！ ユーマ達が隣町に行くって知ってましたか？」

「それぐらい……ああ、そういうことか」

俺は一回店に戻りバビットさんに尋ねる。

バビットさんは何か言うこともなく、ただ、俺を見てニヤニヤと笑っている。

「くくく、ちゃんと別れは伝えた方がいいぞ？」

その後、バビットさんの厚意で夜の営業は休ませてもらい、俺はすぐに荷物を持って町の出入口

である門の近くで待つことにした。

何も言わずに別れるのは寂しいからな。ただ、なぜ俺には言ってくれなかったのかと、モヤモヤした気持ちが押し寄せてくる。

こんな気持ちは初めてで、どうしたらいいのかわからない。

斥候スキルの影響もあって、姿を隠しているから、誰にもバレていないだろう。

あいつらが来た時に絶対捕まえてやるからな……

——カーン！ カーン！

大きな鐘かねの音で俺は目を覚ます。教会が朝を知らせるために鳴らすものだ。

「ふあ!? もう朝か！」

今まで、鐘の音が鳴るまで寝ていたことがなかった。

門の前で見張っていたつもりが、いつの間にか寝てしまっていたらしい。

すると、門から見て正面の冒険者ギルドの方から、勇者のアル、ユーマ、ラブ、ナコが歩いてきた。

「次の町って何があるんだろうね？」

「ここにはない職業もあるらしいよ？」

「はあん!? 俺この間斥候になつたばかりだぞ」

「ちゃんと説明を見てないから、そうなるんだよ？」

「何事にも慎重にならないとダメなゲームだもんね」

本当にあいづらって仲がよさそうだな。

「よっ、お前達も行くみたいだな」

門番さんが四人に声をかける。

「隣町なのですぐに――」

四人は笑いながら門番さんと話をしている。

俺は全く知らないのに、なぜか町の人達は前から知っているような口振り。

俺は斥候スキルを解除してユーマ達に近づく。

「おい、俺には挨拶なしか？」

「おつ、ヴァイトじゃないか！ 見送りに来てくれたんか？」

あれ、思っていた反応と違う。なぜ、ユーマはこんなに明るく答えるんだ。

バカだからか？ もしくは俺なんてどうでもいいってことか？

イライラしてくる。きっと考えすぎて寝不足なのも、関係しているのだろう。

「ヴァイトさん、これには――」

「ナコちん、静かに」

喋り出そうとしたナコを、ラブは笑いながら制した。

いやいや、お前達も関係あるんだからな？

友達だと思っていたのは俺の方だけだったのか、そう考えると勝手に涙が出てくる。

「おいおい、ヴァイトどうしたんだ？」

ユーマは心配そうに俺の顔を覗き込む。

「えええ、ヴァイトさんが泣いちゃったよ」

一方ユーマと違い、アルはその場であたふたとしている。

「な、泣いてない！ 目からよだれが出てくるだけだ！」

頑張つてこらえようとしても涙が溢れ出てくる。

この感情をどうしたらいいのか、俺にはさっぱりわからないのだ。

「うつ……尊とくとい。もうヴァイトさん推しにはたまらないよ」

「ラブ……」

アルが呆れたような顔でラブを見て呟く。でも、今はそんなことよりも――

「俺はお前達の友達じゃなかったのか！」

[[[?]]]



ユーマ達はお互いに顔を見合わせる。

なんだ、その反応は……やっぱり友達だと思っていたのは俺だけだったのか。

「ははは、ヴァイトは俺と離れるのが寂しかったのか？」

ユーマはニヤリと笑う。

「なっ!？」

「ぬー、ヴァイトさん、ツンデレ属性持ちなのね」

「ラブ少し落ち着いて！ もう、みんなも止めてよ！」

息をハアハアとしているラブをナコは必死に止めているが、俺も怒りでハアハアと息が乱れてくる。

「俺はヴァイトとずっと友達だぞ！」

「なら、別れも言わずに行くなんて……」

俺はユーマに掴みかかる。

別れの挨拶ぐらいしてくれてもいいだろう。

俺にとってユーマ達は大事な友達なんだから。

そんな俺の腕にアルは優しく触れる。

「あのー、隣町って半日ぐらいで行ける距離ですよ？」

「へっ!？」

俺はアルの言葉に頭が真っ白になる。半日で行ける距離だって……？
今まで森に行った時に町なんてどこにもなかったはずなのに。

こいつらは何を言ってるんだ？

「アップデートで追加されたから。前は見えなかったもんね」

「ははは、ヴァイトはそんなに俺と離れるのが嫌だったのか。いやー、嬉しいな」

ニヤニヤと笑うユーマにイライラが収まらない。

そんなに近いところなら別れもいらない。半日の距離なら、俺の足だと数時間で着く。

無駄に悩んだ俺はバカみたいだ。そりゃー、わざわざ行くことを言わなくてもいいわけだ。

「帰る！」

あまりの恥ずかしさに、俺はそう宣言して店に帰ることにした。

昨日の夜からずっと門で待っていたからな。

「おー、またすぐ戻ってくるからよ！」

そう言っただけでユーマ達は隣町へ向かった。

第一章 社畜、暇な時間は師匠と遊ぶ

「あー、やることないな」

ユーマ達が隣町に行ってから数日。勇者を鍛えることもなく、空いている時間が増えた。

魔物の活動もあれから落ち着いているため、俺が討伐に行く必要はない。

むしろ俺が魔物の討伐をしたら、冒険者として生計を立てている人の邪魔になってしまう。

「久しぶりに休んでるな」

俺を見て、バビットさんが話しかけてくる。

「暇なのも大変ですね」

「うーん、それは大変なのか大変じゃないのかわからないな」

昔は仕込み作業に三十分はかかっていたのに、今では五分もあればできてしまう。

朝活でデイリークエストを半分以上終わらせて、営業前に残りを終えたら昼休みにはもうやることはない。

「それなら、散歩でもしてきたらどうだ？」

「そんなことしたら大変なことに……ならないな！」

ユーマ達が発した日、他の勇者達もほとんどが隣町に向かって町を出ていった。うるさかった町は静かになっている。

今でも町にいるのは、生産職の勇者達ぐらいだ。

「新しい職業体験ができないか、散歩がてら探してみます」

俺は暇な時間をつぶすため、新たな職業体験を求めて散歩することにした。

「ん？ それは散歩とは言わ……はぁー、あいつはいつになったら休むんだ」

店を出ようと歩く俺は、背中越しにバビットさんの呟きを聞いた。

さて、まずは冒険者ギルドに行くことにした。

「こんにちは！」

「ヴァイトくん、また戻ってきたの？」

朝一に冒険者ギルドに行った時に、事務員のデイリークエストは終わらせた。

ついでに戦闘職のデイリークエストももう全て終わらせている。

「やることなくて暇なんですよね」

「私達も暇よ？」

そう受付の職員さんが言う。

冒険者ギルドも、勇者達が隣町に移動したことで、以前の静けさを取り戻していた。

それだけ勇者達がいたことで生活がガラリと変わっていたのだ。

「たまには俺と模擬戦でもするか？」

声をかけてきたのは、剣士の師匠、ジェイドさんだ。

今日は魔物の討伐に行っておらず、冒険者ギルドで他の冒険者と情報共有をしているみたいだ。

「模擬戦ですか？ それなら鬼ごっこの方が——」

「いやいや、俺が悪かった。あれは俺達でも無理だ」

「ん？ 無理じゃないですよ？ 走るだけですし、せっかくなんでみんなで走りましょうよ！」

「「えっ!？」」

ジェイドさんだけではなく、近くにいた冒険者達の声が重なる。

魔法使いのエリックさんを中心に冒険者達がジェイドさんを睨んでいた。

みんなそんなに走るのが苦手なんだろうか。

「決まりです！ みなさんと鬼ごっこしたかったんですよー！」

師匠達や冒険者達に微笑むと、みんなため息をついていた。

俺に誘われた彼らは、渋々と訓練場に向かって歩いていく。

「俺達今日で死ぬのか？」

「さすがに死ぬ手前でやめてくれるよね？」

「でもあの勇者達を見ていたらね……」

「はあー」

弟子相手に逃げるのも悪いと思ったのか、みんな渋々だが参加してくれそうだ。

本当に師匠達にも恵まれている。

「レックスさんも行きますよ」

「いや、俺は家の掃除が……」

禁酒を始めたレックスさんが家に帰ろうとするが、俺はすぐに腕を掴んで連れて行く。

「それなら今日の朝もやっておきましたよ？」

「ああ、いつも助かるな。つておいおい離してくれー！」

訓練場に着的たら、早速ルールの確認だ。

「俺が鬼でみなさんが逃げる方でいいですか？」

「あー、この際反撃するのもありにしたらどうだ？」

ジェイドさんが鬼ごっこに新たな提案をしてきた。

「僕もあまり走れないので、そっちの方が助かります」

エリックさんもそれには賛成していた。

「そもそも鬼ってなんだ？」

ジェイドさんが聞いてくる。たしかにこの世界に鬼は存在しない。いや、地球にもいないが……

「えーっと、オーガみたいなやつですかね？」

「なら、尚更反撃しないとダメじゃないか！」

うーん、でも冒険者達が反撃したら、それはもう鬼ごっこではなくてしまう気がする。

「これでヴァイトが流されたらいいね」

「でも、あいつ地味に頭がいいぞ？」

師匠達はコソコソ話し合っているが、俺には丸聞こえだ。

「それだと模擬戦になりますよね？」

「チッ！ 気づいたか！」

師匠達は俺と模擬戦をしたかったのだろうか。その方がいいなら……

「模擬戦をするなら、武器を家に取りに帰らないと——」

「いやいや、あの矢が当たったら、俺達死ぬぞ？」

あの矢とは、俺が大蛇相手に使ったショートスピア型の矢のことを言っているのだろう。

普通の矢よりも重いため扱うのは難しいが、その分威力は抜群に高い。さすがに師匠達なら、怪我はするにしても、あれくらいでは死なないだろう。

「聖職者スキルでいくらでも回復できるから大丈夫——」

「ぜひ、鬼ごっこでお願いします！」

気合の入った返事が聞けたので、俺は嬉しくなって笑いかける。

「じゃあ、逃げてくださいね」

「ヒイ!？」

どこからか悲鳴のような声が聞こえたが、俺は気にすることなく、目をつぶって三十秒数える。師匠達とする鬼ごっこはいつぶりだろうか。楽しみだ。

前世ではこうやって元気に大人と遊ぶことってほとんどなかった。

記憶にあるのは電動車椅子に乗って、必死についていったことぐらいだ。

三十秒数え終え、俺はゆっくりと目を開ける。

「よし、行きま……あれ？」

しかし、師匠達や冒険者の全員が訓練場からいなくなっている。

「あいつらなら町に逃げて行っただぞ？」

そこに、隣の小屋で様子を見ていた解体士のおじさんが、そう教えてくれた。

どうやら町の中全てを使つて鬼ごっこをするらしい。そういうことなら、俺も全力で追いかけるまでだ。

◇ ◇ ◇

俺は愛用の剣を冒険者ギルドに置いて、門の近くまで一気に走った。

ヴァイトとの鬼ごっこは、延々と追いかけて、終わりのない地獄だ。

いつも勇者達とやっているのを見ていたが、見ているだけでも、魔物達に囲まれている方がよっぽどましだと思っただった。

「ジェイド、そんなに急いで——」

「シー——」

門番が声をかけてくるため、俺は静かにするようにジェスチャーをした。

ヴァイトはこの町の中で一番足が速いからな。いつもバツと出て……

「みいーつけた」

どこからかヴァイトの声が聞こえた。

斥候スキルも持っているため、あいつの存在は認識しづらい。

周囲を見渡すと、ニヤリと笑うヴァイトが背後に立っていた。

「うわああああああ!!」

俺はヴァイトに捕まって……いなかった。

「はい、じゃあ他の人を探しますよ」

「えっ?」

ヴァイトは俺の体に縄を巻きつけた。

……何をするつもりだ?

足に力を入れて急に走り出すヴァイト。

縄に繋がれた俺がどうなるかはすぐにわかるだろう。

「うおおおおお!!」

そのまま俺はズルズルと引っ張られる。これは強制的に走らないといけないってことだろう。
ヴァイトに捕まった俺はただひたすらに走るしかなかった。

◇ ◇ ◇

僕はバビットの店に逃げ込んだ。

「少し匿^{かくま}ってください!」

「ん? エリックどうしたんだ?」

「ヴァイトに追われているんです!」

ヴァイトもまさか、僕がここにいるとは思わないだろう。

体力がない僕はひっそりと隠れて、見つからないように逃げ切る予定でいる。

他のやつらは僕と違って、ただ逃げることしか考えていない。

バビットは不思議そうな顔で僕を見ていた。

さすがに誰も考えつかない案に、僕は笑いが止まらない。

あっ……笑っていたら見つかってしまっ。

「それなら意味ないぞ?」

え? 意味がないとはどういうことだ?

「ずっと前から目の前にいますよ?」

「へっ!」

気づいた時には目の前にヴァイトがいた。

「うわああああああ!!」

あまりの驚きに、僕はその場で叫んでしまっ。

こいつは姿が見えない魔物なのかと思うぐらい、急に現れたのだ。

斥候の才能があるからって、これまでの実力があるとは思わなかった。

「エリックさんの魔力はわかりやすいので、すぐに見つけられますよ？」

「それってどういうことですか？」

魔力で人を判断する。そんなことができる人物なんて、おつぎつまだん王宮魔導士団ぐらいだ。

ヴァイトはそんな力まで持っているのか。

「んー、なんとなくですが、知っている人の魔力や雰囲気って感じ取れるんですよ」

どうやら魔法使いとしての実力だけではなく、他の才能も相まってヴァイト特有の能力が開花したのだろう。

「くくっ、さすが僕の弟子だよ」

「ありがとうございます」

そう言ってヴァイトは僕に縄を巻きつけてきた。

これは何をやっているのだろうか？

「じゃあ、行きますね？」

「えっ？」

まだ立ち上がってもない僕を引きずっていくヴァイト。

店の外に出ると、他の冒険者達も縄に縛られた状態で捕まっていた。

「ジェイド……もう捕まっていたんだな？」

「ああ、俺は一番初めだったからな。こいつの訓練は地獄を超えていた……」

ジェイドの顔はどこかやつれていた。

いや、ジェイドだけではない。

「疲れたなら回復属性魔法を使いますね」

ヴァイトは一人ずつ疲労を管理して、回復属性魔法をかけている。

そんなことされたら永久に走れる人間になってしまう。

ああ、これは地獄です。

◇ ◇ ◇

「鬼ごっこなんてやってられるか！」

すぐに家に帰って来た俺は久しぶりに酒を飲もうと準備をする。だが、いつも置いてある場所に酒がない。

「ヴァイトのやつ、隠しやがったな！」

「ちゃんと働かないレックスさんが悪いんですよ?」

「いやいや、そんなこと言っても俺の楽しみ……ぐわあ!!」

「はい、捕まえました」

いつの間にか体に巻きつけられた縄。

拳闘士として速さと俊敏さが自慢だったが、俺はもう酔っているのだろうか。

いや、俺はまだ酒を一滴も飲んでない。

「これ以上酒を飲むなら、掃除に來ないですよ?」

ニツコリと微笑むヴァイトに、俺はすぐに頭を下げる。

「掃除だけをお願いします！」

ヴァイトがいなければ、俺の家はゴミ屋敷になるからな。

ついでに美味しいご飯もいくつか用意してくれる。

こんな嫁がいたら、墮落^{だらく}していた俺でも幸せになれると思ってしまう。

いや、ヴァイトみたいな女が嫁だったら、一生酒が飲めなくなるか。

「さつきから何か悩んでるようですが、行きますよ！」

俺は考えている間に引きずられていく。

外にはぐったりとして動かなくなつた仲間達。

いつも仲良くしているジエイドやエリックはすでに捕まっているようだ。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ」

エリックなんてブツブツと何かずっと呪術のようなことを言っている。

「どうやら俺達は、最高の弟子ではなく、最強の化け物を作ってしまったのかもしれないな。」

その後も俺達は、ヴァイトが満足するまで走らされた。

第二章 社畜、弟子ができる

「本当にやる事がなくなってきたな……」

「今日は鬼ごっこはしないでいいのか？」

俺が呟くと、バビットさんが聞いてくる。

「もうやってきましたよ？」

「ああ、そうか……」

師匠達との鬼ごっこはあれ以来、もう何日も続いている。最近は走る時間を朝に変えて、短い時間で効率よく鬼ごっこをするようになった。

それはそれでどうかと思うが、遊びに見えてあれは特訓だからね。

ちなみに、師匠達を縄で縛り続けていたら、新しい職業が増えた。

【デイリークエスト】

職業 縄士なわし

縄で一日一回対象物を縛る（1／1） 報酬：ステータスポイント3

対象物のため、人間ではなく物でも問題ない。

「おい、ヴァイト！ 今日夕方にも鬼ごっこ——」

「しません！」

今日も昼の営業から、師匠達はお店にご飯を食べにきている。

あれからジェイドさんは会うたびに鬼ごっこを求めてくるようになった。今まで問題だったスピードや持久力が改善されことで、さらなる高みを目指したいと目標ができたらしい。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ」

「死にません！」

一方、エリックさんはあれから人が変わってしまったのか、穏やかではない。最近じふじんは呪術に目覚めて、魔法使い以外に呪術師という才能が芽生えたらしい。

その影響が常に変わった呪文を唱えている。そのうち俺も教えてもらうつもりだ。

「レックスさん、今日も掃除とご飯を——」

「もうやってきぞ」

レックスさんは規則正しい生活をするようになった。

以前の墮落した生活とは打って変わって、掃除と食事の準備も少しずつ自分でできるようになった。

最近鬼ごっこに誘っても、家があると断られてしまう。

そんなレックスさんの変化は、町でも騒ぎになっており、主婦達から「夫を変えてほしい」と声をかけられることが増えた。

そんな変化はあったものの、相変わらず俺は時間を持て余している。

冒険者ギルドからは弟子をとつたらと言われるが、今は弟子になりたがる人や勇者がいらない。そもそも俺は弟子に何を教えられるかいんだ。

「今日は外に行ってきます！」

「気をつけろよ！」

昼の営業を終えた俺は、装備を整えて、町の外に出ることにした。

今日は森の近くにあると聞いた祠ほしらに行ってみようと思う。

勇者達はみんなその祠から召喚されているらしい。そう聞いて、謎の祠に少し興味が湧いたのだ。しばらく歩くと、木製の屋根が見えてきた。

祠さいだんっていうと祭壇がある、厳かなものを想像していた。

「これが祠で合っているのか？」

だが、目の前にあるのは小さな小屋と、地面に円形に書かれた文字だけだった。祠から勇者が出てきたって聞いたが、人ひとりしか入れないほどの大きさだ。

あれだけの人数の勇者がここから本当に出てくることができるのか……

周りの文字を読んでみるが、何を書いてあるのかわからない。

日本語でもないし、この国の言語でもない。

「まあ、勇者は謎の人物だつてことだな」

祠には何もないので帰ろうとしたら、突然祠が光り出した。

あまりの眩しさに俺は目を閉じる。

「わあー、本当に別の世界だー」

突然声が聞こえてきた。さっきまで祠には誰もいなかったはず。

俺は大きく一歩下がり、警戒を強める。

「誰だ！」

「あー、町に行きたいんですけど、どっちに行ったらありますか？」

その声を聞いて、俺の中で何かがざわめき出す。

まさかこんなところにいるはずがない。ただ、声があいつに似ているだけ……

「さ……くら……？」

「えっ……私の名前はチェリー・フローラですけど？」

「あ、ああ、すまない」

きつと目の前にいる人物は勇者だろう。前世の妹である咲良さくらがこんなところにいるはずがない。それに雰囲気はどことなく妹に似ているが、胸が大きく身長も高い。

咲良はもつとチンチクリンだったからな。いや、記憶にある咲良が小さいだけで、最期のころは目あまり見えなかったから、成長していてもおかしくないよな。

「えーつと……チェリーだったかな？」

「はい！」

明るい返事にちよつと戸惑ってしまう。

「えーつと、町に行きたいんだよね？」

「連れて行ってくれるんですか？」

「ちょうど町に帰ろうとしていたからね」

俺はチェリーとともに町に向かつて歩き出した。

見た目と中身にどこかギャップを感じる勇者。

大人っぽい見た目ののに、声と話し方は幼さが残っているような気がする。

その後も話しながら、謎の勇者チェリーを町まで案内していく。歩くのが遅くて抱えてしまおうかとも思ったが、ナコのことがあったので、ゆつくりと歩いている。

「勇者達はああやって突然出てくるのか？」

「あー、そうみたい、ですね？ 私もいまいちわからなくて……」

「なんか大変だな」

「えっ……ええ」

会話が途切れてしまい、風が吹く音さえも聞こえるほど静かだ。

初対面の女性ってこんなに話しづらかっただろうか。

女性って言っても関わるのは、ナコとラブぐらいだからな。

ラブなんて最近では雄叫びのようなものをあげていることもしょっちゅうだ。

「あのー、町に行ったら最初に何をしたらいいですか？」

「ん？ 何をしたら……あつ、ツボやタルを割るのはダメだぞ。あと、不法侵入もやめた方がいい」

「本当にチュートリアル通りなのね……」

チュートリアル。勇者達がよく言う、俺の知らない言葉だ。

「そのチュートリアルっていうのはなんだ？」

「この世界に来る前に少しか説明みたいなものがあるんです。そこでさっき言われたことや、何かあったら町の人達と関わるようにって言われてます」

この世界に来る前に説明があるらしい。

つまり、勇者達は別の世界からこの世界に召喚されている。

きっと神様のような人が、俺達を心配してくれて説明しているのだろう。

そんな話をしていると、いつの間にか町が見えてきた。

何を話せばいいのか悩んでいたが、気づいたら時間が過ぎていた。

「ありがとうございます！　あとは町の案内をしてくれる人を探して――」

「それなら俺がしようか？」

町の案内ならアルにしたことがある。

勇者は何をやらかわからないから、俺がついていた方がいいだろう。

「では、お願いします！」

俺はそのままチェリーに町の中を案内していく。

「すごいリアルですね！」

チェリーは初めて見る町に興味津々きょうみしんしんなんだろう。アルもびつくりしながら見ていたからな。

「おっ、ヴァイト！　ついに弟子を取ったのか？」

「いえ、新しい勇者に町を案内しているんです」

声をかけてきたのはいつも買いに行っている肉屋の店主だ。

チェリーが俺の弟子に見えたのだろう。軽く返して、俺は案内を続ける。

その後も町の案内をしていると、同じようにみんなから声をかけられる。

「あのー、ヴァイトさんでお名前合ってますか？」

「ああ、自己紹介していなかったね。俺はヴァイトだ」

「さっきからみなさんが言っている弟子ってなんですか？」

「弟子ってのは職業の見習いのことだな。たしか勇者だと二つの才能があるって聞いたぞ」

「ちなみにヴァイトさんは何をされているんですか？」

「俺はヴァイトニストだ」

「ヴァイトニスト？」

チェリーには伝わっていないようだ。

まあ、ヴァイトニストってたくさん仕事を頑張っている俺の行動を見て誰かが造った造語だしな。

剣士なら主に剣を持って戦う人だし、魔法使いなら魔法を使う人。

それならヴァイトニストは俺の生き方から造られた言葉だから、働く人ってところだろうか。

いや、それだとみんなと同じになってしまう。

「うーん……たくさんの職業を学ぶ職業？　みたいな感じだよ」

「だから弓や盾を背負って、剣も持っているんですね」

おかしい装備かもしれないが、チェリーにはこれで伝わったみたいだ。

「ああ、あ、どんな職業でも見習いの間は外に出るなよ？　他の勇者達が見習いの時に外に出て、問題になったからな」

「気をつけますね」

俺はその後三つのギルドやお金の話など、できる限りの知識を伝えた。

「あとは宿屋ですね」

「宿屋……あれ？　この宿屋ってどこにあったかな？」

たしか勇者達は宿屋に泊まっていると、ユーマから聞いた。

ただ、俺は一度も宿屋を見たことがない。

宿屋なら新しい職業体験ができそうな気がする。

そう思いながら、チェリーとともに町の中を歩き、俺達は宿屋を探す。

「全然ないですね……」

「こんなに宿屋ってないものなのか？」

勇者達が泊まるっていうぐらいだから、宿屋は大きいはず。

そう思っていたのに、全く見つからなかった。

「ちょっと家に戻って、聞いてもいい？」

俺は一度店に戻り、町に詳しいバビットさんに聞くことにした。

「ヴァイトおま……女か？」

帰ると、バビットさんはどこかニヤニヤしながら聞いてきた。

バビットさんの視線の先にはチェリーがいる。どこから見てもチェリーは女性にしか見えない。もしかして男性に見えるのだろうか？

「どう見ても女性ですけど？」

そんな俺を見てバビットさんは大きなため息をついていた。

どうやら俺は何か答えて間違えたようだ。

「はあ、それでどうしたんだ？」

「宿屋を探していて……」

「宿屋か？　それなら近くに……あれ？　俺もうまく思い出せないぞ？」

町に詳しいバビットだが、なぜか宿屋に関して思い出せないらしい。

俺達が見つからない勇者が泊まる宿屋。

その後も町の人達に聞いて回ったが、誰も宿屋の場所を思い出せなかった。結局宿屋を見つけられなかった俺達は再び店に戻った。

「宿屋はあったか？」

バビットさんが聞いてくる。

「いや、全然ないです。商業ギルドに行ってもわからなかったです」

「私のために長いこと付き合ってもらってすみません」

どういうわけか、この町には宿屋がないという摩訶不思議なことが起きていた。

ならユーマ達はどこにいたのだろうか。それを知るのは勇者だけなんだろう。

ただ、同じ勇者なのにチェリーがわからないのはなぜだ？

以前ナコがユリスさんの家から出ていった時は、別の場所にいるとだけ言われた。

これはユーマ達が帰ってきた時に聞く必要があるそうだ。

「まあ、宿屋がわかるまでうちにいたらいい。この際、ヴァイトが師匠になって一人前になるまで

面倒を見てあげたらどうだ？」

「俺がですか？」

そんな話をしていると目の前にH U Dシステムが現れる。

【転職クエスト】

職業 ヴァイトニスト (OM職)

デイリークエストを一日十件、十日間連続でクリアする (0 / 10)

報酬：ヴァイトニストに転職する。全ての職業が解放される (師匠と同様の職業のみ)

「やっぱり俺だとかうなるのか」

バビットさんには見えていないだろうが、俺と勇者のチェリーには見える。

「これでヴァイトニストになれるんですね？」

「ああ、そういうことらしいな」

初めてなのか、出てきたH U Dシステムにチェリーは触れて確認していた。

「おいおい、さすがに考えてから——」

「あっ、押しちゃいました……」

「はあー、遅かったか」

俺の制止も間に合わず、どうやらチェリーはヴァイトニストの見習いになったようだ。

「それでデイリークエストってなんですか？」

あの内容だと一日十件デイリークエストを受けないといけない。

すでに時間は少なくなつて、夜の営業も近づいてきている。

しかも、クリアできなければ日数が初期化されるという最悪なパターンだ。

これが勇者達がよく言っていた鬼畜^{きせく}つてやつだろう。

「バビットさん、調理場を借りますね」

俺は説明を兼ねて、早速チェリーを調理場に連れて行く。

「わぁー、本当にお店の調理場だ」

「飲食店だからね？」

とりあえず俺はチェリーに、野菜を洗ってサラダを作るように伝えた。

どうやってデイリークエストが現れるのかわからない。

まずはデイリークエストを十種類出してから、内容の確認をする必要がある。

俺の時は何かしらきっかけがあったが、チェリーも同じだろうか。

「あつ、デイリークエストが出ました」

「どんな内容だ？」

「えーっと……料理を五品作るって書いてあります」

「五品!？」

「それをクリアするとステータスポイントが3もらえるらしいです」

どうやらデイリークエストの難易度が俺よりも高くなっているようだ。

ただ、幸いなことに報酬でステータスポイントがもらえるならどうにかなるだろう。

「あつ、すみません。ヴァイトニストになつてから、まとめてもらえるらしいです」

「あー、人生そんな簡単じゃないよな」

俺の期待が一気に崩れた。さすがにいくらなんでもヴァイトニストの道は厳しすぎるだろう。

このままだと見習いから一生抜け出せないような気がする。

ただもうあとの祭りなので、まずはデイリークエストを出すところから始めることにした。

「よし、木剣を持って振ってみて!」

「やってみます!」

ここは冒険者ギルドの訓練場。チェリーは木剣を持ち上げると、そのまま振り下ろす。

回数を重ねるとチェリーは突然声を上げた。

「あつ、デイリークエストが出ました! えーっと、剣士で一日百回素振りを――」

「百回!？」

どうやらデイリークエストが俺より大変なのは、ユーマや他の勇者と変わらないようだ。

それに問題は山積みだった。

「……十回くらいで限界です」

チェリーは十回くらい木剣を振ったら、力がなくて落としてしまった。

これは、あまりステータスに関係なくできるデイリークエストを選ばないといけないようだな。

「じゃあ、手を握ってもらってもいいか？」

「手をですか!？」

手を握るくらいならばつに気にしなくてもいいだろう。

俺もエリックさんと手を繋いで魔法使いの才能があるって言われたからな。

どうしようか戸惑っているチェリーの手を、俺は取って握る。

俺はチェリーに魔力を送り、精神統一に必要な魔力を感じてもらう。

「何か感じる？」

「あっ……あの、熱いです!」

チェリーはなぜかさくらんぼのように真っ赤な顔をしていた。

魔力を流している途中なのに、チェリーは手を放した。

俺の何がいけなかったのか？

その場で考えるがなかなか出てこない。

「あっ……これってまさか!？」

俺は入院している時によく看護師が言っていたことを思い出した。『一〇五号室のおじいちゃんが手を触ってセクハラしてくるんですね』頭の中では手を触つてとセクハラという言葉がグルグルと回っている。

「すみませんでした!」

俺は何か言われる前に土下座をして謝ることにした。

生まれて初めて土下座をするなんて……

俺はどうすればいいのかわからず、そのまま土下座の状態で思考停止してしまった。

「あっ、頭を上げてください」

俺は言われた通りに頭を上げる。

「いやいや、そこは立ち上がってくださいよ! 別になんとも思っていないですよ」

チェリーが言うなら、セクハラではないのだろう。

どこか目の前にいるチェリーは戸惑いながらも笑っていた。

体が動かなかったから、前世ではセクハラやパワハラとは無縁だった。ただ、これからは気をつ

けないといけない。

「それで、魔法使いは精神統一を五回行えばいいらしいですよ」

どうやら回数的には俺のデイリークエストと比較して、五から十倍になっているみたいだ。

「よし、じゃあ簡単なやつからデイリークエストを探しにいくか」

そのまま弓使い、斥候、槍使いと俺が才能のある戦闘職や、ブギーさんやボギーさんなどがある生産街に連れていった。

今日だけで町の中を何周回っているのだろうか。だが、そのおかげでほぼ俺と同じ職業体験ができるようになった。

ほとんどは俺がきつかけとなっていたため、そこは本当に弟子のような感じがした。

俺達が店に戻ると、ちょうど夜の営業が始まったところだった。

勇者の見習い料理人やウェイターが隣町に向かったため、バビットさんは慌ただしくしている。

「今すぐ準備します」

俺はすぐにお客さんの注文を取るために、バタバタと移動する。

「チェリーも働いてみるか？」

「やってみます！」

チェリーは早速ウェイター……いや、ウェイトレスとして働いてくれる。

しかし、席やメニューを覚えるのは、さすがに無理だったので、案内を任せることにした。

「おつ、お嬢ちゃん、ヴァイトの弟子らしいな」

「はい！」

噂は早く、冒険者達は俺が弟子を持ったことをすでに知っている口振りだった。

「あー、なんていうか。大丈夫か？」

「もうヘトヘトですね」

チェリーの言葉に、店内にいる人達は俺を見てくる。

そんなに俺は大変なことをさせているつもりはないけどな……

一日中歩いていたのが問題なんだろうか。これはパワハラというものになるのか？

「まあ、しつかり休めよ？ あいつはちょっと変わっているからな」

「そうですね。さつきも急に土下座してきたので」

「……」

チェリーの言葉に店内は静かになる。

うん？ その言い方だとかかなり誤解を招きそうだな。

俺が危ないやつに聞こえてしまう。

ひよっとしてチェリーもあの赤髪の勇者と同様に、インテリジェンスINTが低めの頭が弱い子なのか？

だが、そんなことより、あまりにもお客さん達からの視線が不快だ。ここは必殺技の出番だ。

「みなさん、そんなに鬼こつこがしたいんですか？」

俺はニコリと微笑んで一人ずつ目を合わせる。